

長野高専 正員 鹿島健次

1. 要約

実務25年の後教職についた筆者が、前者の末尾近く数年間たずさわった海外コンサルタント業務で少しく体験した感覚をふまえ、語学にも教育にも全くの素人の身でこの6年半国立高専土木科最高学年で開設された技術英語を担当した間の2へ3の留意点、経験則、提言等を略述し、ご批判、参考の資とするものである。

2. 背景と動機

技術系といわず日本の学校教育では中3高3大2(4の前半に主としてと仮定、高専の場合一甲計5年で総時数稍少いが年数略同)の計8年にわたり英語を課しその時数多い計は基そ一般教養専門を廻り他のいかなる学科より最大が一般である。にもかかわらずその実用効果は微少であることが繰返し各界から指摘されており、それを実証するように実務で英語が必要な機会に備え「自信上」企業、私的何らかのレベル、手段一英語学校電波講座等々でやりなおし補強する社会人の語学学習は益々旺盛とその道の情報は伝えている。(注1)

父祖の付まで少くも工料系ではその向きのエリートが先進国の学問技術を学ぶのに必須として勵んだ外国語は今日では主として発展途上の向上に協力しつつ当方の活動範囲を広げるため各自の分野で実用可能水準まで独り幹部といわず全階層の技術者が身につけなければならぬためというように一変した。土木といわず日本の技術者の海外活動領域の8割強を占めるアジア、中東等英語を母国語としない諸国もその例外ではない。(注2)

あろん他国で様々の形で指導・協力あるいは仕事をするときはたとえ片言、金釘流でも相手の言語を使うのがオ一のエチケットかつ喫緊事であるが取りあえずは英語で最少の用務が果せる場合が多い。

それにもかかわらず今日、日本の理工系高等教育では「将来携わるべき仕事で出会う公算の多い場面話題を前提とした英語学習」を課している向きは依然少いようである。

異文化異民族接触に多い日本の中でも特に閉鎖性の強い信州で偶々教職についた時、かねて上述のような実情を懸念していた筆者が能力もかえりみず始め、続けた技術英語授業の要案を次に簡けつに報告する。

3. 実施経過の要旨

a. 授業の特色・留意点など： (1) 語学というより国際協力感覚、発想、姿勢を多少なりとも育成することに主眼をおく。これなくしてはプロジェクト・マネジャのような高級技術者はもちろん中堅もオ一線要員も異文化の土を掘り異民族と一体となつて自他の向上のためにする土木の仕事で円滑に運ぶことは不可能である。(2) 従つて土木各分野のいわゆる術語を教えることなどは(偶々教材で出会ふのは別だが)各専門科目に委ね目標としない。限られた時数でたとえ基本的なものだけでも各分野のそれをカバーすることは不可能である。又これらは後日必要な場面になつてからでも比較的短日月でマスター容易であるように思う。

(3) 中卒までの教科習熟が英語学習の王道、大方の国際会議すらこれにカバー可、要は反覆訓練との語学教育専門家が口を揃えていう説(注3)に沿ひ讀解に偏らずその日の教材をテーマにいさまかなりと技術者らしいQ & Aによる会話、聴取り書取り等を縦横くり返す。(4) 自学自習こそ語学の要、教師は軌道修正役との姿勢を貫き必ず習必復習の際必者読を強調、毎時全員何らかの役に必ずや当ることを目指す(実情は仲々そこまでゆかぬが) (5) 上記(3)(4)の当然の結果として教材の消化進度は遅々、時には1時限数行のみのことも度度、真に牛歩のようであつてもごめやない。

b. 教材： テキストは上述趣旨にあう市販品はないので用いず最新の情報から収集抜粋しプリントし

